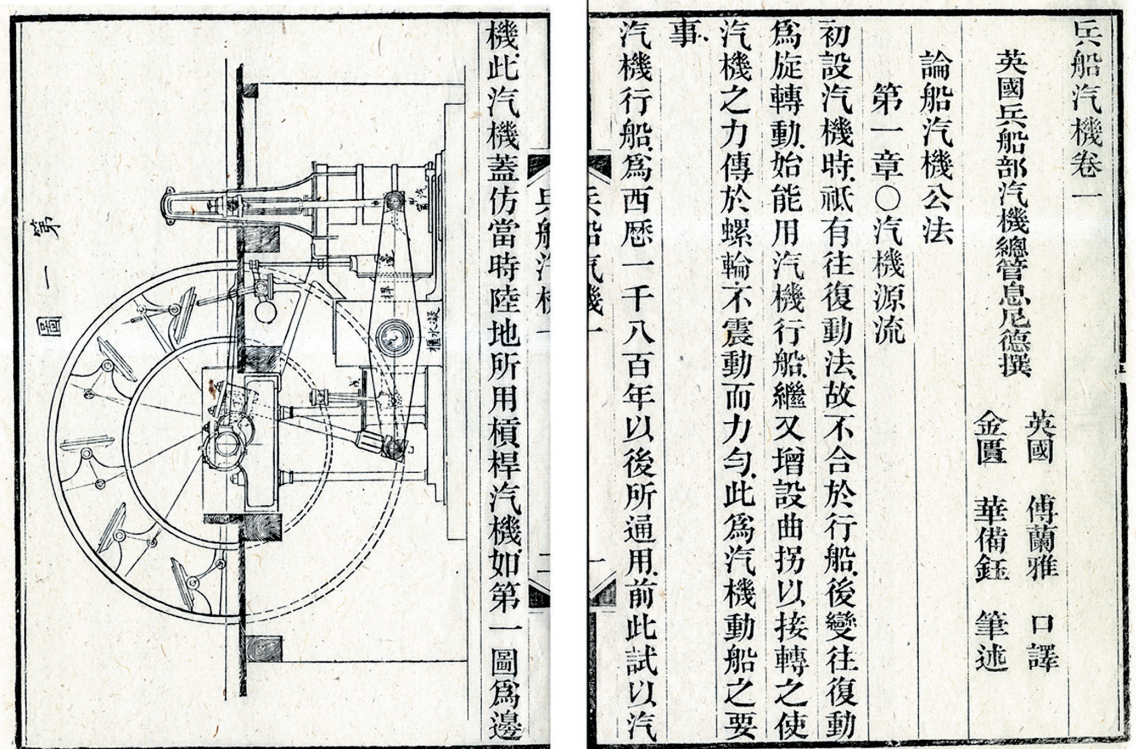


# 漢字と情報

No. 12  
2006・3



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)  
 附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 漢籍目録と漢籍のあいだ
- プリンストン高等研究所の東洋学（上）
- 東洋学文献類目の編集作業
- 人文研のアーカイブス(12)『兵船汽機』

## 漢籍目録と漢籍のあいだ

大西賢人

毎週水曜日の午後、書庫内では有志による「漢籍を見る会」(仮)がひっそりと行われている。この会では、1938年の『東方文化學院京都研究所漢籍目録』(排架目録)に採録された漢籍をその排列順に書架からとりだし、目録の書誌的事項の根拠となった部分(情報源)を再確認すると同時に、人文研で毎年開催される漢籍担当職員講習会の実習に適した資料を探すことを目的としている。よって、本文の内容の理解というよりもむしろ、封面の有無や巻頭、刊記、蔵書印および序跋の記載など、形式的な側面から「漢籍を見る」ことを重視している。この作業は、答えが判明している問題を解くようなものでそれほど困難なことではない、という勝手な予想をしていたのだが、会の開始直後から見事に裏切られた。

書誌的事項の情報源を現物から再確認するという作業が意外にも難しい。封面を情報源として機械的に書誌的事項を採録したような目録の書誌もないわけではないが、序跋や識語に記されている内容を丁寧に読みとって書誌的事項に反映させたものも多く、情報源を確認すること自体が困難な状態である。それでもまだ、目の前の資料のどこかに情報源がある場合は、探し出すことは不可能ではない。しかし、現物からだけではどうしても確認できない書誌的事項につきあたる場合もある。例えば、清陳宗彝輯『蜀石經殘字』の鈔刻は「民國中(排架目録では民國□年)上虞羅氏用三山陳氏道光中刊本景印」となっている。現物では原本の「道光六年三山陳氏重刊本」という情報は封面に記載されてはいるが、上虞羅氏による景印であることは現物から確認することはできなかった。このように、その漢籍が取得された当時、あるいは、目録編纂時にはおそらく自明の事柄であったから、書誌的事項として採録されたが、年月の流

れとともに、その記憶が失われ、記述の根拠となる部分を現物からだけでは確認できない状態になってしまっている書誌もある。

上記のように漢籍と漢籍目録とを比較して見ていくうち、ふと感じたのであるが、今後は、目録の書誌的事項と現物とのあいだに存在する情報源に関する情報を何らかの形で記録し、残していくことができないものだろうか。というのも、今後は漢籍目録において漢籍を同定識別する必要性が以前よりも高まり、情報源に関する情報はその際の一いつの指標となり得ると考えたからである。

現代の大量出版の印刷物と異なり、他の資料との同定識別が困難な漢籍は、それぞれの所蔵機関が一点一点毎に書誌を作成するケースが多い。そのため、漢籍目録の機能が、個別機関の蔵書目録のほかに複数機関の所蔵目録である総合目録の性格を有するようになれば、網羅的なものを目指すほど、採録される漢籍の書誌数は増加する一方である。その反面、漢籍は「孤本」ばかりではないから、目録には、おのずと同じ書名あるいは類似した書名をもつ漢籍の書誌が多く含まれることになる。もちろん、同じ書名であっても、刊年や出版者等が明らかに異なるバージョンの書誌もあるが、同じバージョンであると推定できるような複数の類似した書誌も目録内に数多く存在することになるであろう。例えば、全国漢籍データベースで書名に「説文引經異字」と入力して検索すると、「道光六年序刊本」と「道光六年刊本」という鈔刻をもつ漢籍がヒットする。一見しただけでは、前者は、出版年が不明だが「道光六年」の序文を有する刊本であり、後者は、封面や木記などから出版年が「道光六年」であることがわかる刊本であり、両者には何らかの違いがあるように思われるかもしれない。しかし、後者の書誌の形をとる人文研では、「刊刻出版を表す文字があれば、それに伴う年号、あるいは序文や跋文が書かれた年号を出版年とみなす」ため(この場合は序文に「梓」という字がある)、「道光六年刊本」と記述しているのであり、両者とも序文を情報源として出版年を記述した同



じ版本である可能性が高い。また、書名に「汗簡」、刊年に「康熙」と入力して検索すると、(1)「清康熙四十二年序刊」(2)「康熙四十二年錢唐汪氏一隅艸堂刊本」(3)「康熙四十二年(一七〇三)錢唐汪氏一隅艸堂刊本」(4)「康熙刊本」(5)「康熙四十二年序錢塘汪氏一隅艸堂刊本」という鈔刻をもつ漢籍がヒットする。(3)の出版年の部分が漢数字で表した西暦の補記を含んでいるのを除けば、(2)と(3)の記述は同一であるが、他はそれぞれ微妙に異なっている。人文研の所蔵する(2)の漢籍をみると、説文の場合と同じように序文にある「錢唐汪立名」「鏤版」「康熙歲在昭陽汗洽」という情報と、板心にみえる「一隅艸堂」という情報から上記のような鈔刻となったと考えられる。よって、この場合はおそらく他の書誌も同類の版本である可能性が高いであろうと推測はできるが、もし『汗簡』の康熙本を全く見ることができない状況にあった場合は、目録の記述からだけでは版本の異同を推測することが困難であったかもしれない。もちろん、もともと各々の漢籍の書誌が異なった目録規則に依拠して作成されていることを考慮すれば、書誌的事項だけでは判断はつけにくい(そもそも鈔刻の記述の相違によって、検索条件に、「刊本」を入力すると(1)が、「汪氏一隅艸堂」の場合は(1)(4)が、「康熙四十二年」の場合は(4)が、「康熙四十二年序」の場合は、(2)(3)(4)がそれぞれヒットさえしないので、データベースで鈔刻の書誌的事項を検索条件とする場合は注意

を要する)。ただ、「出版年は序文から」「出版者は板心から」というような、書誌的事項の情報源が何らかの形で記録ないしは表現されていれば、複数の類似した書誌の版本の異同を判断する上でひとつの指標となるのではないだろうか。例えば、情報源が現物にある場合は書誌的事項と同時に当該漢籍の書影を表示させると版本の識別の参考になるであろう。人文研所蔵の一部の漢籍の書誌は、巻頭書影(2005年9月現在で5,756枚)が検索結果画面で表示されるようになっており、今後も書影は順次追加される予定である。もちろん実際に現物を見て、比較するよりも確実なものはないが、漢籍の利用者が必要とする資料を目録上で、効率的に探し出すための付加的な情報にはなり得るであろう。

漢籍の定義にもよるが、一般的に漢籍かどうかを判断するひとつの基準となる年の下限は1911年であるといわれる。あと数年もすればそれから一世紀をむかえることになる。もちろん現代からみた相対的な「古さ」という側面だけで判断できるものでもないが、資料としての漢籍の価値は、今後も増えることはあっても減ることはないであろう。このような漢籍を保存し、後世に伝えていくと同時に、それを必要としている利用者や資料とを結びつけることが所蔵機関の果たすべき役割であり、この点において漢籍目録は非常に重要である。分類による排列や一覧性といった点で冊子体の漢籍目録の重要性は依然として失われてはいないが、上述したように、データベースによる総合目録という漢籍目録の機能を果たしていく上で、利用者が資料をより効率的に探すためには漢籍のもつどのような情報が有効であるかをあらためて確認することも必要であろう。個人的には、「漢籍目録と漢籍のあいだ」には、書誌的事項の情報源の他にも利用者にとって有効な情報がまだ存在しているように思われる。それが何であるかを見つめるためにも、引き続き「漢籍を見る会」に参加して、漢籍目録と漢籍に対する理解を深めていきたい。(センター事務員)

## プリンストン高等研究所の東洋学（上）

石川禎浩

2001年9月から半年間、アメリカのニュージャージー州プリンストンにある高等研究所（Institute for Advanced Study）で滞在研究をする機会を得た。かのアインシュタインが在籍したことで知られる高等研究所は、しばしばプリンストン高等研究所と呼ばれ、それゆえプリンストン大学の付属研究所であるかのように思われているが、それは正しくない。プリンストン大学とは密接な協力関係にはあるが、高等研究所はそれ自体、独立した民間の研究機関である。

高等研究所（以下、IASと略称）の特徴は、大きく言って二つある。一つは、運営形態の特徴で、この研究所の活動が常勤の研究員に数倍する内外の訪問学者（IASでの呼称は、メンバー〔Member〕）を毎年受け入れることによって成り立っているということである。私が所属した年度の歴史学研究部門でいうと、常勤研究員（Faculty）が6人に対して、メンバーは50人以上にも達した。メンバーの滞在期間は、3カ月から半年で、各人には専用の研究個室が提供される。

そして、今ひとつ特徴は、その運営理念において、「無用の学の用」を尊び、研究者個人の知的探求心のみがすべてに優先されていることである。その理念には「俗世の煩わしさや未熟な学生たちに対する親のような配慮といったことで、研究が妨げられることのない」ことが謳われている。つまり、公務の会議や授業から研究者を解放し、静かな環境で思いのままに研究に専念させることが学問の真の進歩につながるという、今日では信じがたい理念によって運営されているのである。

この理念ゆえであろうが、米国内外からここに集まるメンバーは、すぐ近くにあるプリンストン大学や北70キロほどのニューヨークなどで授業を

することを禁じられている。また、三日以上プリンストンを離れる場合には届け出が要り、五日以上の不在は原則的には認められないことになっている。むろん、皆が皆それを遵守しているわけではないが、メンバーは、ここにいる間、研究以外の雑務から解放される代わりに、研究以外をしてはならないことになっているのである。

ただし、その分、メンバーへの生活サポート体制は万全で、住居（ゴルフ場のような広大な敷地に、一棟あたり4～8世帯の暮らす二階建てアパートが散在）の手配に始まり、子供の就学手続きまで、あらゆる面での便宜を図ってくれる。戦後間もなく、湯川秀樹博士に続いてIASに招聘された朝永振一郎博士は、ここでの滞在を「極楽に島流しになったような工合<sup>1</sup>」と言い表したが、その状況は、半世紀以上たった今でも変わらない。IASの設立経緯や沿革、そしてこの希有な研究所の意義については、専論<sup>2</sup>もあるので詳細はそちらにゆずり、以下では、ほとんど知られることのないIASの東洋学研究を紹介しよう。

高等研究所といえば、真っ先にアインシュタインやゲーデル、フォン・ノイマンといった名前が連想されるように、物理学や数学の研究機関として名高いが、研究所には歴史学部門も併設されており（ほかに、数学、自然科学、社会科学の3部門がある）、同部門の主要な対象領域の一つに「東アジア学」が当てられている。これまでエルマン氏（B. Elman, 現プリンストン大学教授）やフォーゲル氏（J. Fogel, 現ヨーク大学教授）といった日本でもなじみの専門家が二年期限の客員教授をつとめてきたが、現在はディ・コスモ氏（N. Di Cosmo）が常勤の教授をつとめている。私は、東アジア交流史の研究を計画していたフォーゲル氏（2001-03年に客員教授）の勧めもあって、IASのメンバー公募に応じ、幸いに選に当

1 「木庭助教授あて書簡（1949年9月16日）」『朝永振一郎著作集』第6巻所収。

2 IASの歩みをアメリカ史の中で分析したものとしては、斎藤眞「プリンストン高等研究所の設立」（『アメリカとは何か』平凡社、1995年所収）がある。

たってプリンストンの客となったのだった。

IASには立派な歴史／社会科学系図書館があるものの、東洋学関連の書籍（特に中国書）はほとんどない。だが、IASのメンバーが中国学の資料不足に悩むことはない。すぐ近くのプリンストン大学には、全米でも屈指の東アジア図書館があり、IASのメンバーはプリンストン大学関係者と同等の利用条件を与えられているからである。プリンストン大学の東アジア図書館は、俗にゲスト・ライブラリー（The Gest Oriental Library）とも呼ばれ、その蔵書量（2001年時点で、中国書43万冊、日本書16万冊、韓国書1万4千冊、洋書2万冊——いずれも雑誌を含まず）だけでなく、貴重な明版本を多く蔵すること、また中国医学の典籍の数々でも知られている。

ゲスト・ライブラリーの名は、それら中国書収集のスポンサーであった実業家 Guion M. Gest (1864-1948) にちなむ。ゲストは、長患いしていた緑内障の症状が中国の馬応龍目薬でやや緩和したことがきっかけで、中国の漢方医書の収集を始めたといわれ、駐北京アメリカ公使館付の海軍武官だったギリス (I. V. Gillis, 1875-1948) の協力の下、1920-30年代にかなりのコレクションを築いた。そして紆余曲折の末、ゲストのコレクションは、1937年にロックフェラー財団の支援を受けたIASの購入するところとなったのだった。

コレクションの規模は、漢籍を中心に当時で約10万冊、購入金額は13万5千ドルと言われる。誕生して間もないIAS（1930年創立）が、このコレクションの購入にあたって、如何なる構想を持っていたのかは判然としませんが、当時IASはプリンストン大学の好意により、大学の建物（Fine Hall, 現在の Jones Hall）に仮住まい状態だったため、同コレクションはIASが所有権を持ちながらも、その管理をプリンストン大学に委ねることになった。かくて、IASが現在の敷地（プリンストン大学から西へ1マイル）に研究棟を建てて移転した1939年以降も、ゲストのコレクションはそのまま大学内に残され、以後のプリンストン

大学による収書と合わさり、今日に至っている。

余談だが、戦後の一時期、かの胡適がゲスト・ライブラリーの「館長」（正教授待遇の Curator）をつとめている（1950年秋から2年間ほど）。胡適は1942年に駐米大使を辞した後、米東部に留まり、晩年の主要業績となった水経注研究に打ち込んだが、その際に彼が資料探索において最も恩恵を受けたのが、ゲスト・ライブラリーであった<sup>3</sup>。戦後、いったん中国にもどり、1949年に台北を経て再度アメリカに渡った彼が、ゲスト・ライブラリーの館長に就任したのには、この水経注研究以来の縁が働いていたはずである。

もっとも、胡適は館長時代も相変わらずニューヨークに住み続け、たまにプリンストンを訪れるにすぎなかったもので、プリンストンには胡適の旧宅のようなものはない。ただし、ゲスト・ライブラリーの沿革・概要に関する最初のまとまった文章は、胡適の手になるもので、現在でも図書館の受付カウンターで、この文章の抜き刷りを館の案内として配布している。その中で胡適も、ゲスト・コレクションがIASによって購入されたものであることに言及している。

このように、プリンストン大学の東アジア関係図書は、IASの購入したゲスト・コレクションに源を発するのだが、いうまでもなく、現在の蔵書の多くは、同大学が胡適をゲスト・ライブラリーに迎えたり、東アジア学部を設けたりした戦後に購入されたものである。今日、IASで東アジア学の研究をするメンバーたちが、プリンストン大学の東アジア図書館を自由に使うことができるのには、こうした事情——もっとも、IASとゲスト・コレクションとの因縁について、メンバーの大半は無自覚だが——が気づかっているのかも知れない。（人文科学研究所助教授）

3 Hu Shih, My Early Associations with the Gest Oriental Library (1951). 今『胡適全集』（安徽教育出版社）第39巻に収める。

4 Hu Shih, The Gest Oriental Library at Princeton University (1954). 同上。本稿のゲスト・ライブラリーに関する記述も、この文章に多く拠っている。

## 東洋学文献類目の編集作業

村田康彦

1993年4月に、神戸大学図書館より東洋学文献センター（現漢字情報研究センター、以下「センター」と略す）に赴任して以来、ずっと「東洋学文献類目（以下「類目」と略す）」の編集に携わってきた。その間の作業内容と変遷をメモ書き風にまとめてみた。なお、肩書き、名称はすべて、当時のものである。

1981年度版より「類目」は大型計算機センターの汎用機（MSP）を利用して編集作業を行ってきた。システム開発は図書館情報大学（後に大型計算機センター）の星野聰教授とセンターの勝村哲也助教授を中心に、大型計算機センターの技官およびセンターの都築澄子氏等の事務職員により進められた。類目の編集作業の流れは、手作業の時代の「論文分類→データ排列→印刷原稿作成」という手順をほぼ踏襲しており、主として「データ排列→印刷原稿作成」の部分を機械化している。データ入力は業者に外注することになった。

類目編集作業では、1992年まで毎週勝村助教授をはじめとする教官と事務職員からなる「類目委員会」が開かれていたが、1993年からは編集作業は主に事務職員が担当し、教官が分類等の点検を行うことになった。

大型計算機センター（MSP）で使用可能な文字コードはJIS 1, 2水準のみで、それ以外（ハングル、音標符号つきローマ字を含む）は外字としてMSPに外字登録をしなければならなかった。簡体字を含むデータは、外字処理ではなくTCCコード（三角編号法＝6ケタの数字）で入力され、京大側で開発したTCCコード-漢字変換テーブルによりJIS（繁体字）に変換し、簡体字1文字に複数の繁体字が対応している場合は、校正リストに繁体字の候補を全て出力して、校正担当者が適切な文字を選択した。和文、欧文及び簡体字を

含まない中文のデータはJISコードで入力されるが、漢字は繁体字に正規化するため、日本常用漢字などは変換テーブルを通して繁体字に変換した。ハングル、音標符号つきローマ字などは、外字としてMSPに登録され、論文分類作業の際、入力用原稿にそのコードを朱書きするという方法をとった。甲骨文、金文などはデータベースには入力せず“□”で表し、冊子体では、原文をコピーし該当文字を切り貼りした。

1992年までは原稿の出力も大型計算機センターのプリンターを使用していたが、出力時にプリンターを独占するので「特殊ジョブ申請書」を大型計算機センターに提出しなければならなかった。そこで、1993年（「類目」1991年度版）からは、大型計算機センターで作成した類目印刷用TEXファイルをセンターのパソコンに転送して出力処理ができるように工夫した。そのシステムは、大型計算機センターの河野典技官を中心に開発されたものである。

2000年4月に東洋学文献センターが漢字情報研究センターに改組されたのに伴い、センターにサーバが導入された。類目編集については、大型計算機センターのMSPのサービスが終了することによって、2001年よりセンターのサーバで編集作業が行われることになった（2001年度版のデータより）。システムはセンターの守岡助手が開発した。データ編集作業の流れやデータ形式はMSP時代とほぼ同じである。データ入力は台湾の漢珍会社に依頼し、ユニコードで入力され、CD-ROMで納品してもらうことになった。ユニコードを採用することにより外字の問題はかなり改善されたが、それでも毎年5～10文字の外字が出現する。今のところはWINDOWSの外字エディタで外字を作成し、貼り付けるという方法で処理している。新システムで編集、印刷した「東洋学文献類目2001年度版」は大きさがB5版からA4版に改められ、本文が原本どおりの字体となって、簡体字、日本常用漢字もそのままの形で表示されている。

（センター事務員）

## 人文研のアーカイブス (12) 兵船汽機六卷附一卷

英國息尼德撰 英國傅蘭雅口譯  
清華備鈺筆述

(江南製造局譯書彙刻之内)

光緒中江南製造局刊排印本

梶浦 晉



ここにあげた『兵船汽機』は、『江南製造局譯書彙刻』という叢書の内の一書である。江南製造局は、李鴻章の命により、同治四年（1865）、上海に設立された官弁の軍事工業関連機関である。機器廠、鑄銅鉄廠、火薬廠などの工場部門や管理部門のほか、翻訳館が付設されていた。

翻訳館は同治七年に創設され、中国在住の西洋人の協力を得て、軍事関連技術を中心とするヨーロッパの科学技術のほか、法律や外交等に関する著述の翻訳・出版が精力的に行われ、近代中国の西学受容に大きな役割をはたした。この『彙刻』は翻訳館で翻訳・刊行されたものを集めたもので、木板と排印が併用されている。

明清時代に刊行された叢書は、1945年以前に相当量が日本へもたらされたが、本『彙刻』の所蔵は比較的少ない。ちなみに、全国漢籍データベースを検索すると、東洋文庫、国立国会図書館など数カ所の所蔵が確認できるが、いずれも不全あるいは零本である。このなかで本所蔵本は154種をおさめ、国内ではもっとも多い。本所所蔵『彙刻』は、前回紹介した『歴代詩選』と同じく陶湘旧蔵本である。本所では、陶湘旧蔵本のうち、叢書・叢刻を購入したのであるが、彼が古典的な内容のもののみでなく、近代的著述の叢書も入手していたことは興味深いことである。

ところで陶湘に関連して、董康『書舶庸譚』巻第八に、以下のような興味深い記述がある。

(乙亥五月) 十三日……三時許詣文化研究會訪狩野並晤倉石吉川會中所儲叢書全部皆由蘭泉讓渡以故與心如相契尤深導心如至二階逐一摩挲陶氏以聚叢書鳴於一時各部精選初印及足本於藏宋元舊槧外特樹一幟得本會爲之永遠儲藏不負蘭泉廿年裝續之苦心矣

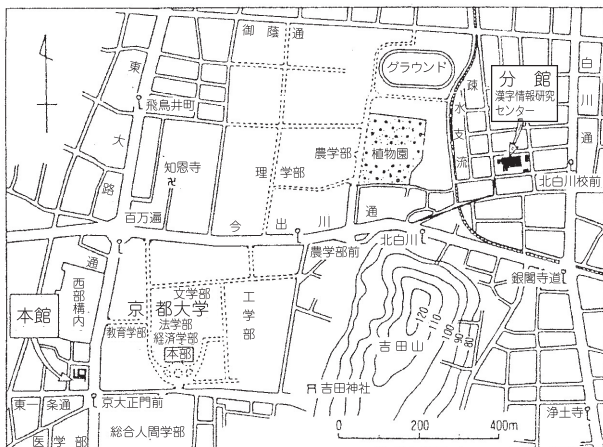
これによると、昭和十年（1935）に陶湘（蘭泉）の弟陶洙（心如）が董康とともに来所し、兄湘旧蔵の叢書を、書庫二層で感慨深げに観ていたことが記されている。陶氏旧蔵本は、今日においても本所所蔵の漢籍の重要な部分であるが、本『彙刻』を含む叢書部は、現在も書庫二層に配架されている。  
(センター助手)

## HP・TOPICS

「データベース」のコンテンツの一つに「所蔵中国雑誌」の検索ページがあります。これは、2002年度から約2年間かけて配架された現物を確認しながらデータベース化したものです。雑誌名や出版主体の変遷も追跡調査してあるのが売りです。「詳細版」では、請求番号・雑誌名とともに編者・出版地・出版社・OPAC-ID・NCID等の一覧表があります。まだ未調査のものもありますが、地下書庫内にある中国雑誌はすべて入力済みです。和書、洋書についても同様の作業を行えばいいのですが、それは予算次第ということであ…(笑)。

### 所蔵中国雑誌一覧(詳細版)

請求番号	雑誌名	編者	出版地	出版社	備考	OPACID
052 R-403	一般	立達学会	上海	開明書店		
052 S-2926	七一	七一雑誌編輯委員会	武漢	湖北人民出版社		
920.5 T-112	七月	張老人	名古屋	采華所林	原本重慶七月社	SB01759055 A
052 K-3137	九分壹		香港	九分壹出版社		
052 N-539	二十世紀	二十世紀雜誌社	上海	編者		SB01759065 A
305 H-922	二十一世紀	中国文化研究所香港中文大学	香港	香港中文大学		SB01482283 A
334.05 T-367	人口研究	中国人民大学人口研究所編輯部	編者			SB01468237 A
334.05 Z-562	人口與發展	人口與發展編輯部	成都	四川大学人口研究所		
052 Z-197	人文	人文月刊社	上海	編者		SB01759071 A
052 Z-197	人文	人文月刊社	台北	東方文化書局		SB01759071 A
052 T-434	人文及社會科學集刊	中央研究院三民主義研究所、...	台北	中央研究院三民主義研究所		SB01610155 A
052 T-274	人文科學論叢	台湾光復文化財團人文科學委員会	台北	台北光復文化財團		



## [DICCS NEWS]

・全国漢籍データベース協議会の第6回総会を2006年3月10日(金)14時~16時に学術総合センター2階 中会議室にて開催する。議題は以下の通りである。

「今年度の事業報告」

高田時雄 (人文科学研究所教授)

「中国国家図書館古籍デジタル化の現況」

張志清 (中国国家図書館教授)

「NACSIS-CATと全国漢籍データベースのリンク：京大人文研DBからの変換」

宮沢彰 (国立情報学研究所教授)

「来年度以降の計画について」

井波陵一 (センター教授)

「質疑応答」

司会：矢木毅 (人文科学研究所助教授)

・「東洋学へのコンピュータ利用」第17回研究セミナーは、2006年3月24日(金)10時より京都大学学術情報メディアセンター北館にて開催の予定である。

・11月7日(月)~11月11日(金)に2005年度の漢籍担当職員講習会中級を実施したが、10月に行った初級の受講者から講師及び参加者が親睦できる場を設けてほしいとの要望があったので、さっそく初日終了後にセンター会議室にて懇親会を催した。受講の意欲が増すとともに相互の情報が交換できて有益であるとなかなか好評であり、参加者の希望があれば講習会の「恒例行事」としてもいいかもしれない。

・最新のセンター刊行物

「京都大学人文科学研究所漢籍分類一覧」(井波陵一著、2005年11月)

発行日 2006年3月3日

発行所 京都大学人文科学研究所附属  
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>